

# オオタルマワシ（節足動物・端脚類）が造ったハウス

久保田 正・岡 有作

オオタルマワシ (*Phronima sedentaria*) は、節足動物門、甲殻綱、端脚目、タルマワシ科、タルマワシ属に含まれる一種であり、海洋プランクトンとして熱帯域から温帯域に分布し、外洋性種として黒潮域に普通に出現します。

本種の雄の体長は6.5~11.0mmです。雌では15.0mm以上約42mmに達し本属中で最大の大きさです。また雌はゼラチン質プランクトンの体の一部を利用してタル型の保育囊と呼ばれるハウス（または棲家やbarrelと言う）を造り（以下ハウスと呼ぶ）、その中で卵を産み、子供を育てるといった変わった習性の甲殻類プランクトンとして昔から知られています。日本近海には本属の4種が分布していますが、本種以外にタルを造ると言う情報は見当たりません。

本種の雌が造ったハウスの外形の表面を良く観察すると形態に明らかに違いが見られ、大別すると次の3つに識別されます。このことからハウスのゼラチン質プランクトンのグループを特定することが出来ます。

タイプ A：ハウスの表面に数本の稜線があり、ハウス全体が、軟らかい。これは原索動物のサルパ類 (*Salpa*) またはドリオラム類 (*Doliolum*) に由来します（図1-A）。

タイプ B：ハウスの表面はスムーズであり、透明で硬く形を保っています。これは腔腸動物の管クラゲ類 (*Siphonophora*) に由来します（図1-B）。

タイプ C：ハウスの表面はイボ状の突起があり、タイプBと同じく硬く形を保っています。これは、原索動物のヒカリボヤ類 (*Pyrosoma*) に由来します（図1-C）。

上記で述べたタイプCのハウスに入っている本種の行動を水槽内で観察したところ、人がプールの折り返しでターンする動きと同じような行動を何回も繰り返して、その動きに見入ってしまいます。また、ハウス内の本種の卵巣が発達すると、図2のように白色となり、図3は、放卵してハウスの内面に沢山産みつけられた状態を示めています。親は、子供が孵化するまでハウスに留って育て、子供もタルを餌として食べるようです。

また、ハウスに入っている本種が、1967~1972年に駿河湾の三保海岸に生きたまま打ち上がった深海魚のミズウオ (*Alepisaurus ferox*) の40個体の胃内に合計208個体が捕食されていました。さらに、外洋域ではミズウオ他カツオ類やマグロ類などの大型魚類の餌料として捕食されています（久保田・森, 1995）。このようにハウスと共に本種は、大型有用動物の餌料生物となっており、海中ではかなり目立つ存在で浮遊生活していると考えられます。

将来、本種がゼラチン質プランクトンを捕えてどのようにしてハウスを造るのか明かにされることを期待しています。

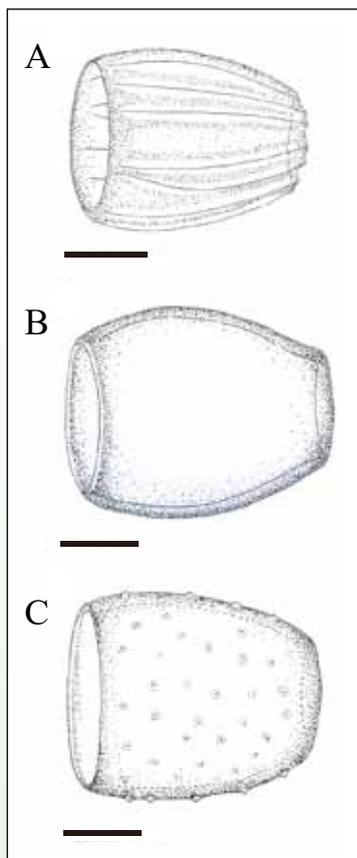


図 1. 雌が造ったハウスの代表的な3型(久保田・森, 1995より引用・一部改変). スケール: 10mm



図 2. ハウス内に納まっているオオタルマワシとその卵巣(右の白色). (撮影: 岡 有作)



図 3. ハウス内の本種と内面に産みつけられた卵塊(白色). (撮影: 岡 有作)